

解題

石井英篤

一九四五年の敗戦によって、日本は平和な民主主義国家に変わったと多くの人々が信じた。しかし、日本の支配層は形を変えつつ国内人民、また「発展途上国」に対する収奪と抑圧を継続した。それに対して様々な抵抗運動が発生したが、中でもマルクス主義と共産主義革命を掲げて実力闘争を闘った勢力が「新左翼」だった。本書はそのような新左翼党派であった戦旗・共産同に結集した田畑久志氏が当時組織内で執筆した文章を中心に編まれている。

もうはっきりとは思いつけないのだが、田畑氏と初めて会ったのは、氏の序文を読むと一九八〇年代の後半だったようだ。そうだとすると、地区組織内の同じ支部で田畑氏と文字通り寝食を共にしていたのはほんの数年にすぎない。ぼくは九一年には本部編集局に移行したはずだからである。そして情けないことには、数年後にはその本部からも脱走し組織を離脱することになる。

六〇年、七〇年の二つの安保闘争に事実上敗北した新左翼は、人質立てこもりや無差別テロ、内ゲバ、リン

千殺人などによっても人民からの信頼を失い、一九八〇年代前半までには、革マルの動労運動を除けば、大きな闘争拠点は成田空港反対闘争Ⅱ三里塚闘争くらいしか無くなっていた。

そんな八〇年代に活動家であった我々は明らかに遅れてきた左翼と言うしかない。しかし、だからこそ我々は、ファシオンや流行では無く、本気で日本革命と世界変革を求める政治勢力としての自負を持って、極めて濃厚で先鋭的な時を過ごしたのである。

高卒現場労働者であった田畑氏が、本書に収められているような大変レベルの高い知的で思索的な文章を書き、もちろん長きにわたって闘争現場で先頭に立ち、また組織者として高い能力を発揮され、同時に市民社会の中でも信頼される労働者であり、後には管理職としても手腕を発揮されることになるのは、まさにこの本気で革命運動にかける強い意志があったからに他ならないだろう。それがどれだけの苦闘であったかは、氏に比べれば短い期間であったが同じ状況を生きた者として痛いほど分かる。

氏は序文で「コンプレックスの塊」と述べられているが、それはごくも同じだ。理論的にも実践的にも著しく劣っていた自分も劣等感の塊だった。正直言って今でも本書収録の田畑氏の各論文をちゃんと理解するのは難しい。理論水準も活動歴もずっと上回っている田畑氏の作品の解題を書くなどおこがましいにも程があるが、それでも氏が書けというのは、ただ巡り合わせで当時ぼくが年長で、氏を「指導」する立場にいたからだろう。その当時の様々な不十分性を謝罪するつもりで、過大なる御依頼に従う。

解題と言うからには本書収録の各作品の成立事情を明らかにすべきなのだが、ここに集められた文章のほとんど全てが、ぼくが地区を離れ、組織を離れた後のもので詳細を知らない。なので、田畑氏が組織に結集した頃の状況を説明することで換えたいと思う。

我々が所属していたのは、共産主義者同盟（共産同＝BUND＝ブント）系の通称「戦旗（日向＝荒）派」である。この当時の正式名称は「戦旗・共産主義者同盟」だった。「荒」というのは最高指導者だった荒岱介のことで、日向は彼のペンネームである。

戦旗派は七〇年代の終わりころから、三里塚闘争を中心軸に飛躍的前進を遂げ、安保粉砕、反天皇制などを掲げて、大衆の実力闘争とゲリラ闘争を織り交ぜながら、集会への動員戦でも大衆動員の数を急激に増やし、「非革共同系で最大の武闘派」として突出した存在となった。

ぼくが当時所属していた地区（ありていに言えば三多摩地区＝コード名＝PQR）も、バブル景気に浮かれる世の中にも関わらず組織が拡大し続けていた。逆にそういう時代だからこそ矛盾を感じる若者がいたということなのだろう。関係ないが同じ頃、吉祥寺には我々の集会呼びかけのステッカーと競うように、あちこちにオウム真理教（の前身団体）のステッカーが貼られていたのを良く憶えている。

田畑氏が結集したのはそれから少しした頃だ。氏はぼくがキャップを務める支部に配属となった。支部員は、ぼくと田畑氏ともう一人。途中で引越しをはさみながら、三人でしばらく共同生活をした。皆二十代だった。

党勢を拡大していた戦旗派だが、しかし、その実態はカリスマ指導者・荒岱介によるワンマン経営体質を脱することがなかった。荒は一方で強固なイデオロギー主義的指向を持ちつつ、実際の組織としては「高卒労働者の党」、「武装し闘う革命党」を謳って党＝軍のソヴィエト型組織、レーニンの鉄の規律を実践する強固な共同体を作り上げようとした。その象徴のひとつが「全額上納」「全員アジト生活」だ。党の下部組織である共産青年同盟（キム）に加盟した者は原則的に、地区党に所属する支部の事務所で共同生活を行い、労働者の場合はその収入の全額をいったん上納し、改めて活動費として生活等に必要な費用を支給されることになる。

事務所とは言っても、狭いアパートの一室などでプライベートはほぼ無く、仲の悪い者が一緒になったらそれ

こそ地獄、タコ部屋と言えばタコ部屋だが、ここでは毎日活動家同士が顔を付き合わせて討論し、交代で食事を作って一緒に食い（酒を飲み）、様々な作業をする作業場、もちろん会議室としての機能も果たした。それが本書で触れられている「アジト」だ。

ぼくは組織を離れてしまったので、その後こうした活動形態がいつまで続いたのかは知らないが、この環境下、ある意味でギリギリと思想教育というか切磋琢磨というか、理論武装といわゆる「共同主観」の形成が行われていった。

序文で田畑氏が述べられているように年に二回は論文提出が義務づけられていたし、全党合宿での学習会や、折々に地区単位、支部単位で学習会が設けられた。

学習内容は、安保や原発など闘争課題に関連するものを除けば、ようするに「荒思想」の学習であった。荒自身の書いた文献や、その時々に関心を持ったテーマ（公平に言えば彼がそのタイミングで組織に必要なと考えたテーマ）が学習された。ある時期には近現代哲学であり、初期マルクスであり、レーニンの革命論や、毛沢東をはじめ歴史的人士の実存的な追体験だったりした。

またそうしたものの他に、度々「自己総括」文書を書くことも求められた。むしろ学習が学習として一人歩きするようなことは否定されており、学習も実践経験も「主体化」されることが目指されていた。そのことは田畑氏の各文章に色濃く表れている。

ぼくは後になって、荒が町工場の社長レベルの組織力しか持っていなかったことに気づいたが、しかし八〇年代当時の彼のカリスマ性は凄まじく、また過渡期革命論や血債猛省主義、スタク論などその革命論も独創的で群を抜いており、ぼくをはじめ多くの者が心酔した。荒は一時期、我々の地区へ直接指導に入っていた時期もあって、その影響はとても強かった。荒イズム（本人はそう言われるのを嫌っていたが）は、我々の思想的営為

の底辺に否応なく存在した。

だが、そんな荒も時に闘争の方向に大きな問題を生じさせることがあった。本書と直接関係のあるところで最も大きな問題は「八九事態」における三里塚闘争からの撤退であろう。一九八九年は、昭和天皇の死から始まり、天安門事件、ベルリンの壁崩壊、「冷戦終結宣言」まで激動の年だったが、戦旗派も警備公安警察からの激しい弾圧の渦中にあった。そんな中、三里塚芝山空港反対同盟熱田派指導部との路線対立が激化。荒は熱田派内のヘゲモニーを奪取すべく反対同盟への盗聴を含む非公然諜報戦を展開したが、それが決定的な引き金となって反対同盟から絶縁を言い渡されるに到った。公安当局からも自力で建設したばかりの横堀団結の砦の使用禁止命令を出され、翌年の砦攻防戦を最後の打ち上げ花火として、実質的に三里塚闘争を放棄することとなるのだった。

冒頭にも触れたとおり、ぼくは一時期編集局員として本部に住んでいたことがある。荒も基本的には本部を生活の拠点にしていたので、ときおり漏れ出る荒の本音を聞くことがあった。荒は実際には大衆運動が嫌いだったと思う。戦旗派大躍進の起爆剤となった三・二六管制塔占拠闘争も、実は荒が下獄している時期に残存指導部の指揮下で行われたものだった。歴史にイフはないが、もし荒が収監されないか、もっと早く出所していたら戦旗派の歴史は全く違うものになっていたかもしれない。荒にとって三・二六闘争の「勝利」と三里塚闘争の高揚はむしろ鬱陶しい重荷だったのではないかと、ぼくは疑っている。

いずれにせよ、これまでの最大の「看板」であった三里塚闘争を失い、ソ連崩壊を契機にした「共産主義」の社会的敗北に直面した荒の思想的関心は、廣松渉を筆頭とした現代思想へと移っていった。そして一九九五年には「パラダイム・チェンジ（パラ・チェン）」を宣言して決定的な思想転換に到り、ついにマルクス主義と訣

別することになる。組織は市民団体「プント」（後「アクティオ・ネットワーク」）へと改変され、基軸をエコロジ―運動に移しつつサークル活動やワークショップを展開したが、荒の退陣と死を経て二〇一〇年代には実質的な活動を停止した。本書との関わりにおいては、これ以上荒の思索的、組織指導的変遷に触れるつもりはないが、蛇足ながら彼が晩節を穢すような、強権的、俗物的振る舞いを見せたという噂は各所から聞こえてきた。残念なことだ。

本書を通読されれば分かるように、田畑氏の論考が様々な方向に向かっていくこと、また内容的にはマルクス主義の評価について唐突に百八十度違っている部分があるのはそうした背景によるもので、それは田畑氏自身の内発的变化というより、残念ながら荒岱介の思想的転換に引きずり回された結果と言わざるを得ない。

こうした荒の強い影響の下に行われた思想的営為を、否定的に捉えるか、それでもそこに明らかに見られる思索の高次の発展を肯定的に考えるのか、当事者として結局は荒岱介の不肖の弟子であることから逃れられないぼくには何とも言いがたい。読者の判断に委ねるところだ。

ぼくは物理的には荒のごく近いところにはいえ、すでに組織を離れていたこともあって、彼の「転向」の論理も理由も事情も気持ちも知るよしがない。正直に言えばあまり興味も無い。ただ荒と荒の組織の下にいた者たちはマルクス主義を清算して別の形の実践活動を模索し、ぼくは実践活動を捨てながらマルクス主義にしがみついて今日まで生きてきたというだけだ。

ここで荒批判を展開するつもりはないが、ぼくは荒のマルクス主義清算には大きな誤りがあったのではないかと思っている。彼が生前好んで使っていた言葉を使えば「産湯を捨てて赤子を流」したのではなかろうか。もっとも、荒岱介「転向」当時、ぼくは脱党によるショック状態で頭が大混乱しており、そうした荒と戦旗派の思

想的転換について考えるだけの余裕がなかった。ぼくの混乱状態は組織離脱から十年続いた。さらにその後やっと自分の頭で物事を考えられるようになるまで十年かかった。それは自力で「教条」から抜け出すために必要な期間だった。そこまで来てようやく荒イズムの誤りと限界を総括することが出来、ぼくは脱レーニン・マルクス主義へとたどり着いた。

この場でつたない自説を展開するのは気が引けるが、荒が廣松を踏み台にマルクス・エンゲルス主義否定へと向かったのとは別の回路で、少しでも問題を整理してみたい。

荒岱介が日本の左翼運動の限界を考察していったこと自体は当然のことではあるし、ぼくも彼の批判に賛同する部分が多くある。しかし彼の批判はまずもって思想的方向から進められた。だが本当に必要だったのは組織論的（自己）批判だったのではないだろうか。

二十世紀、マルクス主義者はその大半がマルクス・レーニン主義者だった。やれスターリン主義だ、トロツキ―主義だと罵りあいながら、それでも皆マルクス・レーニン主義の旗を降ろそうとしなかった。そこには抗いがたい「権威」があった。レーニンが史上初めてマルクス主義を掲げて革命に成功した事実はあまりにも大きかったのだ。しかしレーニンの革命手法はあくまでも二十世紀初期のロシアという限定された状況における個別特殊な手法であって、それをマルクス主義革命のスタンダードとして普遍化するのには無理があった。問題の根幹は「マルクス・レーニン」主義の定式化にあったのだと思う。

おそらくレーニンのボルシェヴィキ組織論は、亡命先におけるインテリ革命家を組織する上で出来上がったもので、ぼくが思うに労働者一般や民衆を組織する論理ではない。そこにおける厳しい「鉄の掟」は一番には直接現場にはいない、ややもすれば観念的な指導者たちに対する締め付けとしてあった。もちろんツァーリの秘密

警察による過酷な弾圧に打ち勝つために秘密結社として活動しなくてはならなかったロシア国内の現実からも必要だったろうが、しかしそれは大衆に求めるべきものではなかった。

しかしレーニンは薄氷の上での革命の成功を防衛するのに必死にならざるを得ず、革命直後から民衆を弾圧する政策に手を染め、それはスターリンによって純化されて継承されスターリン主義に「発展」したのである。スターリン主義の害悪はあらためて記すまでもないが、まさにこの形態がマルクス主義のスタンダードとして世界に「輸出」され、いわゆる「東側諸国」の国内弾圧政策容認の根拠となった。

そしてそれは遠く日本の新左翼まで強い影響下に置くことになった。新左翼党派の多数は反スタ（戦旗派はスタ克と位置づけた）を掲げたが、それは結局戦旗派を含めた多くの党派において内在的に克服されなかったと思う。荒岱介もいかにスターリン主義を克服するかという文書を数多く書いているが、いま読み返すと「よく言うよ」と思ってしまうところもある。いくら自由な討論とか主体的に考えろと言われたところで、現実には動員目標という「ノルマ」が課せられ、共同主観の形成という名目での事実上強制に近い形での共同生活や上部からのオルグの前では、それが結局は党指導部に従うという結果にしかならないのは明白であった。

それはまさに本書にも映画評が収録されているアニメ『エヴァンゲリオン』の主人公シンジのようなものだ。エヴァに搭乗する気も続ける気も無いシンジに対して、周囲の大人たちは「嫌ならやめろ」「自分で考えろ」「好きにして良い」と言いながら、最終的には十四歳のシンジを追いつめてエヴァに乗せてしまうのだ。それがあたかもシンジ自身の決断であったように思いこませて。

しかしマルクス思想の中にはレーニン主義は存在しない。ぼくは十年かけてマルクスとレーニンを分離することが出来たわけだが、ただレーニンの手法がマルクス主義者のスタンダードとなった理由のひとつに、マルクス自

身の限界があったのも確かだ。つまりマルクスは哲学的、思想的に近代を乗り越えようとしたのだが、実際には近代主義の手のひらの上から出ることが出来なかったのだ。

マルクス主義者はみな実践至上主義者である。有名なマルクスの言葉、「哲学者たちは、世界を様々に解釈してきただけである。肝心なのは、それを変革することである」(『フョイエルバッハ・テーゼ』)を引用し、言葉より実践だと言う。しかしこれこそ近代主義そのものではないのだろうか。つまり「神を殺した」近代は倫理や道徳、論理やご託より、現実的な実践を重んじ、かつそれを正当化してきた。つまり実利主義である。そのことが人類史上最大の驚異的な経済発展を実現する思想的原動力となった。だがそれは同時に様々な問題を引き起こした。地球温暖化をもたらした近代産業の暴走と、スターリン主義へと暴走した共産主義運動とは、実は近代の実践至上主義という同根の問題なのではないのか、というのが多くの疑念である。

マルクス主義の実践至上主義がもたらした弊害の最大なのは、批判と自己批判の自由を制約したということだ。実践家は自己批判が出来ない。なぜなら実践における失敗は実践において解決しなくてはならないからだ。たとえば賃上げを勝ち取るという方針が出る。そこで失敗した場合、それを信じてついで来た同志たちに「方針が間違っていました」とは言えない。それは清算主義だ。責任をとるとは必ず賃上げを勝ち取ることなのであり、次にはより強力な戦いを実現しようということにしかならない。本質的な誤謬の指摘は常に(相対的な)外部からしかできないし、もっと言えば間違った方針を出した組織がつぶれて(もしくは指導者が退陣して)、別の方針を出した組織(もしくは新しい指導者)が出現するという、よりダイナミックな新陳代謝の形で誤りが修正されていく他ないのだ。しかし当然、その新しい組織や指導者も必ずどこかで間違うだろう。実践上の誤りのスパイラルからの脱却は、つまりそのとき実践から自由＝離れている者(評論家)の指摘によるしかない。それを受忍する、いわば寛容さが必要なのである。(言うまでもないが「賃上げ」はたとえであって、一般論として

労働組合の質上げ方針が誤謬だと言っているわけではない。）

残念なことに党派の実践運動は常に否定されねばならない宿命にある。ひとつの党派の実践運動は必ず終焉し新たな運動が取って代わる。それが健全性を保つ唯一のサイクルであり、指導者はいつか打倒されなくてはならない。しかしどのような政治運動もより強くより長く継続しようとするモメントを持つ。実践至上主義はその傷をより深くすることになる。多くの大衆をも巻き込みながら。

さらにこれは荒の主張に重なるところだが、マルクス主義の近代主義的陥穽は、その論理を近代合理主義、単純に言えば科学主義の上に作っているところにもある。十九世紀において科学主義は絶対的正当性を持っているように見えた。しかしたとえば量子論などに見られるように、すでに現代科学は実証性によって必ずあるひとつの結論にたどりつくとは限らないという地平にまで到達した。マルクス＝エンゲルスによる史的唯物論の「科学」性に依拠して「絶対的真理」を標榜することはもはや難しい。

これはようするにマルクス主義の「正当性」をどう担保するのかという問題だが、このポスト・モダン化した世界ではもう「唯一の真理」など存在しないことを認める以外無いだろう。しかしそれは自らの「正義」を捨て去ることではない。この問題にこれ以上割く紙面は無いが、なぜそれが「正義」なのかという論拠はマルクス主義者がずっと恐れてきた「宗教」にこそあるのではないか、というのが現在のぼくの仮説だ。ここで言う「宗教」は宗教団体とか一般的な意味ではなく、いわば「メタ宗教」もしくは形而上学以前の宗教のようなイメージであって、スターリン主義的なマルクス主義の宗教化とは位相の違う話だが、ぼくはまだそれを語るまでに到っていない。

もうひとつ経済政策について、これも荒がどこかで言っていたと思うが、マルクス・エンゲルスの生産力主義も近代主義的陥穽だろう。マルクスは経済の永続的、無限の発展が共産主義を実現すると考えていたようだが、それはまさにファンタジーである。もはや人類の経済活動はその限界を超えて地球温暖化に象徴されるように人類自らの生存さえ脅かすようになった。経済競争によって「共産主義」が「資本主義」に勝つなどという妄言はとつと死滅した。むしろ逆にいま重要なのは経済発展を指標にしない、望まないというスタンスだ。未読だがベストセラーになったトマ・ピケティの『21世紀の資本』ではいずれ資本主義では格差は広がるだけだと言っているらしい。資本主義は必然的に経済発展を求めるが、それと人間の幸福はイコールではない。

共産主義は本質的には保守思想である。歴史的経緯から一般的に「革新」と呼ばれるし、政治用語としてばくもその意味で使うけれど、本質的に革新的なのは資本主義の方だ。常に流動して変化し続けなければ生き残れないのが資本主義のシステムであり、安定的でステイックなあり方を求めるのが共産主義の思想である。劇的発展はマルクス主義の望むものではないはずだ。

総じて歴史的にマルクス・レーニン主義者は政治革命優先主義であった。俗物的マルキストが大好きな言葉のひとつに「下部構造が上部構造を規定する」というのがある。これはマルクスの『経済学批判』の序説に書かれている唯物史観の公式とも言われる部分のエッセンスであるが、昔はこれが誤解されることが多かった。下部構造とは簡単に言えば生産から分配にいたる経済システムである。政治革命によって生産手段を資本家から奪い取り、国有化などの形で共有化すればよい、下部構造を変えれば自動的に上部構造も変わる、つまり人々の意識がそれによって「共産主義化」するということのである。しかしそれは大きな間違いだ。そもそも「上部構造」とは制度や組織、仕組みなどのことを指すのであって、人間の意識のことではない。矛盾的にその反対側にあるのが

レーニンの「外部注入論」なわけだが、さすがに荒と戦旗派の思想的レベルはそこまで低俗ではなかったし、九〇年代後半のサークル運動の展開はこれらの考え方を止揚しようとしたものだったのかもしれない。

なお、マルクス主義運動を考える上で、暴力やテロリズムの問題にも触れるべきだろうが、この点は本書にもほとんど関係ないので割愛させていただく。

マルクス主義は理想主義である。こう書くとき昔は反発されたものだ。マルキストはリアリストであるべきだというのが常識だったからだ。しかしいったいリアリストとは何なのか。現実的であることが最も正しいことなら、現状を認めることが最も正しい。そうではない。理想を持つからこそ、理想を追求するからこそ、その時々において現実的な判断が必要とされるだけで、本質的にわれわれは理想主義者でなければならないと思う。

しかしそのことは非常に厳しい問題を突きつける。つまり理想に反したら、それが理想の方に近づくかないものだとしたら、いかに「現実的」であろうとその政策を捨てるしかないということだ。レーニンやローザ・ルクセンブルグが直面したように、理想が現実か、革命の勝利か断念か、その断腸の決断をしなくてはならない。しかしそれが真の革命＝近代の乗り越えを達成できるか否かの分かれ目になるのだ。

このことは逆に言えば、政策はいかなるものでも、それが理想に向かう方向性を持っているなら容認しうると言うことである。現実的政策はどこまでもフレキシブルでよい。荒も言っていたかもしれないが、別に「左翼らしい」スタイルなど無い。ただしいつでも自分のやっていることを厳しく検証し続けることが出来なければ、何をやってもダメなのは言うまでもない。

長い脱線をしたが、最後にもう一度本書に戻ろう。ご本人が述べておられるように田畑氏は高卒現場労働者だった。そして革命運動の最も過酷な最前線の現場で闘った闘士であり、あえて言わせていただければ木訥な一兵卒であった。彼は学究の徒として象牙の塔に籠もっていたわけではない。彼の思索と論考は労働者革命家として闘いとられたものだ。専門の学者や評論家と比べれば、彼の著述は粗く不十分かもしれない。今から見れば誤りと思われる点もあるかもしれない。しかし、ここで読み取るべきはそこではない。

読者はここに若き血がたぎっているのを感じるであろう。この著作集はまさに田畑久志氏の青春そのものなのだ。

今の氏は、もはや当時と同じ立場でも見解でもないかもしれない。そうだとすると、ぼくは氏の根底にあるものが完全に変わったとは思っていないし、それは生物が新陳代謝を繰り返すように、今も日々新たな何かとして再生され続けているのだと思う。本書に収められた作品がすでに過去の思い出になっているとしても、ぼくは田畑氏の次の「作品」に期待するのである。

(2025/10/07)